

特集 この町のカタチ

八十一年目の記念写真



今から 81 年前
遠い米国からはるばる海を越え
一人の使者がこの町にやって来ました。
使者の名は「メリー」
青い目をした小さな人形でした。
その身に託されたのは
万人の願い 「平和」
日米友好の架け橋として
多くの人々に愛されながらも
混迷を極める時代の中で
数奇な運命をたどった人形は
今も当時と変わらぬ姿のままで
見つめ続けた激動の時代と
そこに生きた人々の思いを
今を生きる私たちに
静かに語り続けます。



昭和2年に沼宮内小にやってきた

友情人形「メリーちゃん」

「この町のカタチ」
それはこの町に暮らす人々の生きる姿
この町に生きる人々の姿や思いを紹介し、ふるさとのこれからを考える特集「この町のカタチ」。

今回は、沼宮内小に保存されている友情人形「メリー」の歩みと町の人々との関わりを通じて、激動の時代を生きた人々の思いや歳月を越えて今に伝わる貴重なメッセージを紹介します。

メリーは、今から八十一年前の昭和二年、日米両国の友好と世界の平和を願った米国の心ある多くの人々によって、友好親善の使者として日本の子どもたちに贈られた約一万三千体の「友情人形」の一体です。同年四月来校したメリーは、町の子どもの間で大変な歓迎を受け、その心に掛け替えない思い出と尊い友情のきずなを多く見ました。しかし、後の昭和十六年十二月、人々のそうした願いもむなしく両国は太平洋戦争に突入。結ばれたきずなは無残に引き裂かれ、戦局の悪化に伴い「友情人形」は敵性人形としてそのほとんどが破却されるなど、悲しい運命をたどりました。しかし、幸いにもメリーは何人かの手で守られて生き残り、同校の児童やその意義を理解する大勢の町の人々に「メリーちゃん」と呼ばれ親しまれながら、今も当時の姿のまま、大切に保存されています。

そうした一方、沼宮内公民館は今年二月、かつての激動の時代を知る人が年々少なくなる中、町の歴史や体験者の証言を後世に伝えようと、「沼宮内温故知新」事業をスタート。多くの人のたちの希望によって、「メリー」は第一回のテーマとなり、参加した皆さんからたくさんの方々の当時の貴重な証言が寄せられました。メリーにまつわる一枚の記念写真の発見から六十二年ぶりの貴重な再会の場が実現するなど、メリーは今もなお町の人々の心に、尊いきずなを深くみつけています。

昭和十六年十二月、日米開戦

引き裂かれたたぎぎな

昭和十六年十一月八日、太平洋戦争が勃発。日米両国の人々に結ばれたたぎぎなは無残にも引き裂かれ、友情人形の多くが悲しい運命をたどりました。町の人々も時代の当事者として、想像を絶する数々の苦難を背負いました

ハワイ爆撃戦果甚大 戦艦一撃沈 四大破す 米艦隊に潰滅的損

【大本営海軍部発表】 八日午後八時四十五分、米艦隊に潰滅的損

いつの時代に生きる人も、望むのは日々の平穏な暮らし。争いの日々を誰が望むでしょうか。日米の開戦を知ったとき、「もう少し話し合っことはできなかったのか」と素直に思ったことを今でも思い出します。しかしその一方で、戦争になつた以上は、国を守るために一身をささげなければならぬと当然のように覚悟しました。当時は、そういう時代でした。

ある町民の日米開戦の日の回想より

日米開戦を報じる当時の岩手日報（昭和16年12月9日朝刊、岩手日報社提供）

届かなかった「願い」

昭和十六年十二月八日、日本軍によるハワイ真珠湾の米軍基地への攻撃を皮切りに、日米両国は太平洋戦争に突入。両国の人々に結ばれたたぎぎなは引き裂かれ、平和への願いは無残にも打ち砕かれました。

戦時色一色となつた国内では、次々と拡大する戦火のようすや「鬼畜米英」などと国民の戦意高揚を促す言葉が新聞紙上に連日並ぶようになり、戦争遂

行のため物資や言論、思想の統制が強化されるなど、人々の暮らしはとも不自由なものになりました。また、全国各地から多くの人が兵士として次々と出征。それまでの平穏な暮らしを離れ、見知らぬ大陸の奥地や南海の島々などの前線に送られ、死線と向き合いました。

しかし、開戦当初は優勢だった日本軍も昭和十七年の中ごろから、反攻を始めた米国をはじめ連合国軍の豊富な国力と物量の前に、次第に劣勢を強いられるようになりました。悪化の一途

をたどる戦局に伴い、家族の元には続々と戦死公報が届けられ、日々の暮らしへの統制も一層強められていきました。

友情人形の悲しい運命

青い目の人形。憎い敵だ許さんぞ。昭和十八年二月十九日の新聞には「友情人形」を敵視する記事が掲載されています。戦地で愛する人を失った人々に芽生えた敵意と憎悪の矛先は、やがて、かつて友好親善の使者として多くの人々に歓迎され、愛されたはずの友情人形にも向けられました。人形は「仮面の親善使」などの烙印を押され、敵性人形として戦意高揚のために子どもたちの目前で燃やされたり、竹やりで突かれるなどしてほとんどが破壊されました。

しかし中には、「人形には何の罪もない」と考えた教員などによってひそかに隠されて生き残った人形もありました。沼宮内小のメリーもそのようにして生き残ったという話が今日まで伝わっています。

日本に贈られた一万二千七百三十九体のうち、現存しているのは全国でわずか三百一十一体。本県では、贈られた二百六十三体のうち、沼宮内小のメリーを含む十六体が確認されています。平成十八年三月現在、みやぎ、青い目の人形を調査する会調べ。

かつてない激動の時代

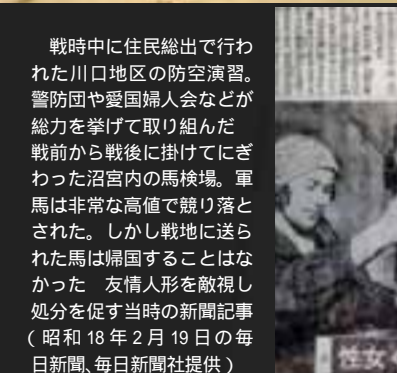
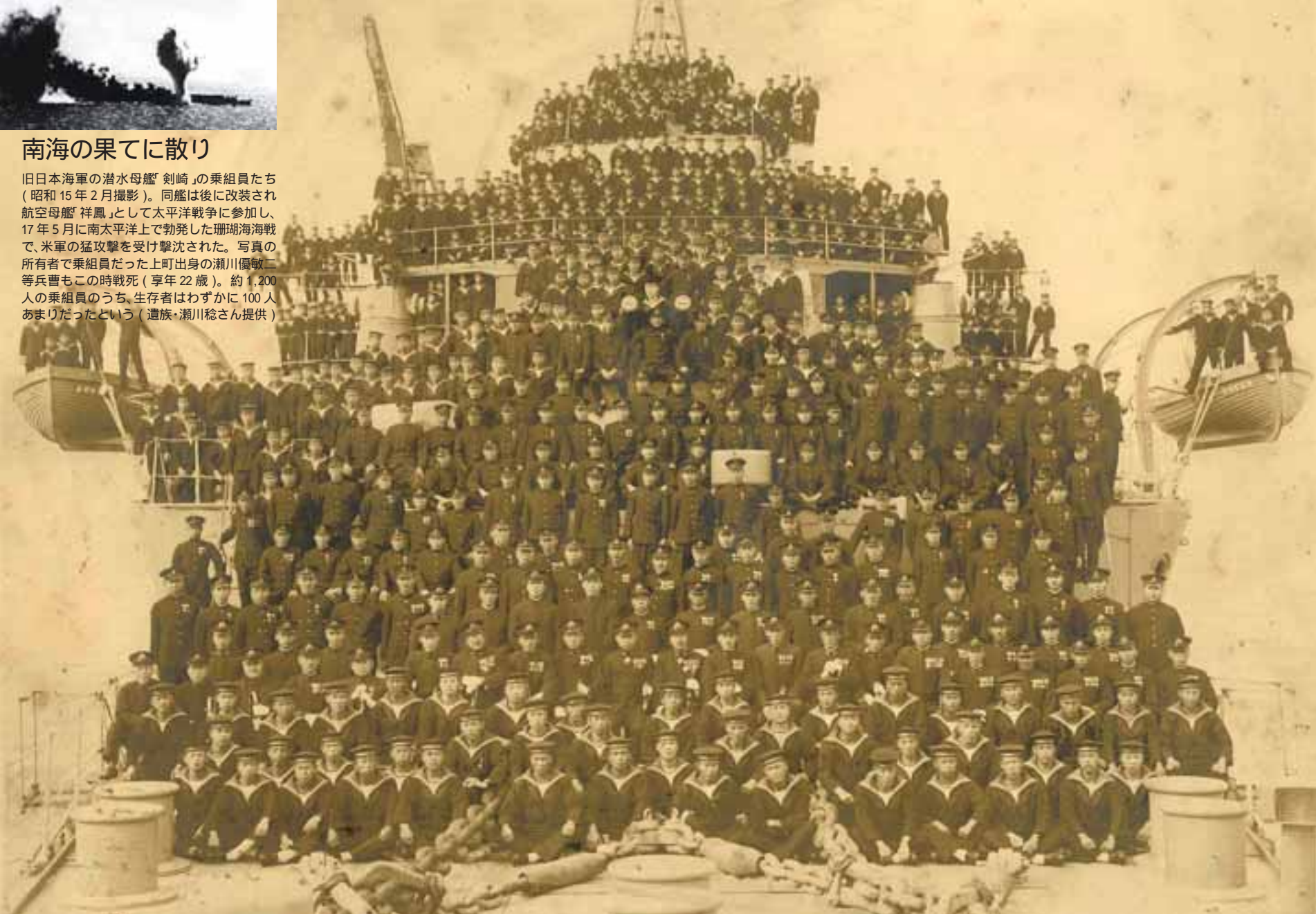
その後、各地で敗北を重ねた日本は昭和二十年八月十五日、連合国に無条件降伏し、太平洋戦争は終結しました。昭和十二年七月七日の盧溝橋事件に始まる日華事変から太平洋戦争が終るまでの日本軍関係者の戦没者は約二百三十万人。民間人を含めると約三百十万人が犠牲になったといわれています（旧厚生省調べ）。本町では、延べ千五百五十五人が兵士として召集され、そのうち五百三十人が生きて再び故郷の土を踏むことが出来ませんでした（県国保課調べ）。

こうした日本史上かつてない激動の時代を、メリーは見つめ続けてきたのです。



南海の果てに散り

旧日本海軍の潜水母艦「剣崎」の乗組員たち（昭和15年2月撮影）。同艦は後に改装され航空母艦「祥鳳」として太平洋戦争に参加し、17年5月に南太平洋上で勃発した珊瑚海海戦で、米軍の猛攻撃を受け撃沈された。写真の所有者で乗組員だった上町出身の瀬川優敏二等兵曹もこの時戦死（享年22歳）。約1,200人の乗組員のうち、生存者はわずかに100人あまりだったという（遺族・瀬川稔さん提供）



戦時中に住民総出で行われた川口地区の防空演習。警防団や愛国婦人会などが総力を挙げて取り組んだ戦前から戦後に掛けてにぎわった沼宮内の馬検場。軍馬は非常な高値で競り落とされた。しかし戦地に送られた馬は帰国することはなかった。友情人形を敵視し処分を促す当時の新聞記事（昭和18年2月19日の毎日新聞、毎日新聞社提供）



時代の証言者たち

1

極楽の島は、阿鼻叫喚の地獄に変わった 玉砕した南海の島ビアクから奇跡の生還



早坂 定吉さん
(88歳、尾呂部)

「極楽の島は、一転して阿鼻叫喚の地獄に変わりました。戦友たちの無残な死に様子が今でも脳裏に焼き付いています」と語る早坂さんは、玉砕の島、ビアクから奇跡的に生還しました。国鉄の操車係だった早坂さんは昭和十四年に徴兵検査で甲種合格し二十歳で出征。陸軍の歩兵として中国北部に送られました。後の昭和十九年の春部隊の南方派遣が決定。すでに日本の戦況は苦しく、南方に向かう輸送船の多くが到着前に撃沈されていたが、幸い部隊は敵の攻撃を受けずに任地のビアク島に到着。初めて見る南の島はのどかで美しく、まるで極楽のようだったといえます。しかし昭和十九年五月二十七日、猛烈な砲撃を伴い約三万人の日本軍が来襲。一方、約一万三千人の日本軍の半数は飛行場建設が任務の非戦闘部隊で、銃は六人に一丁。米



早坂さんが所属した陸軍第222連隊は本県出身者らで構成された陸軍屈指の精鋭部隊だった

軍の火力と物量は圧倒的で、日本軍は洞窟に立てこもり戦いましたが次々と敗れ、山中に追われました。早坂さんは、辺りは死体と死臭が充満し、中には生きながら腐っている人もあり、まさに地獄絵図でした。いつかは自分もそうなると思いつつ、誰かが自分のことだけで精一杯、負傷者は倒れた場所がそのまま死に場所になりました。戦友の無残な死に様を見た兵士の中には、突然自決する人もありましたが、部隊の移動の際、下士官の私はヤシの葉で作った粗末な野戦病院に横たわる重傷者たちに、必ず迎えに来るからと、できるはずもない約束をして、自決用の手榴弾とわずかな食料を渡す役目を果たさなければなりません。あの悲惨な光景を、私は死ぬまで忘れません。こと言葉を詰まらせます。

食料と弾薬が尽きた日本軍は組織的な戦闘が不可能になり、二百人いた早坂さんの隊も六十八人まで減少。ひたすら援軍が来るのを信じて生き延びました。マラリアと赤痢が蔓延する中、早坂さんも動けなくなり、「炭を食べると下痢が止まる」という母親の言葉を思い出し、

2

出撃前夜誰からともなく回った寄せ書き 命運分けた若き特攻隊員と復興への思い



吉田 安衛さん
(80歳、上野口町)

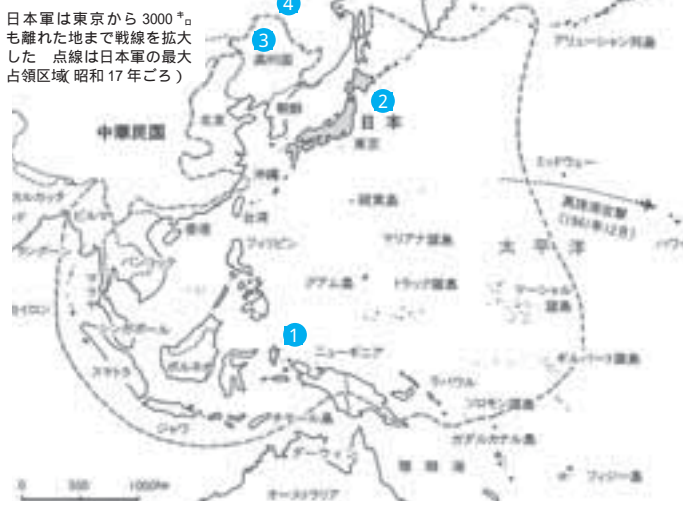
「この寄せ書きを書いたのは当時十六、七歳だった私たち特攻隊員。勇ましい言葉の裏には切ない気持ち

が込められていました」と語る吉田さんは、特攻隊員として配属されていた下北半島から生還しました。商業学校の学生だった吉田さんは昭和十九年六月十六歳のときに海軍予科練習生に志願し、茨城県の土浦航空隊に入隊しました。しかし、すでに飛行機も燃料も満足にありませんでした。翌二十年三月十日の東京大空襲の時には、真っ赤に燃える空が飛行場から見えたといえます。負けるとは考えていなかった吉田さんたち練習生はその後、戦地に配属されることになり、約五百人の同期生は、土浦駅で南北に二分され、吉田さんは北に配属が決まりました。「思えばそれが運命の

分かれ目でした。南に向かった同期生は特攻隊として出撃し、ほとんど戦死したと聞きます。当時を振り返ります。吉田さんたちは、汽車で青森県の三沢飛行場にたかい、途中で通過した沼宮内の踏切では、家族が出て来て見送ってくれました。航空隊とは名ばかりで、陣地作りには明け暮れていた七月の末、吉田さんたちに、特攻隊として下北半島の守備にあたるよう命令が下りました。出撃の前日、宿舎では誰からもなく寄せ書きが始まり、次々と回ってくるノートに寸刻を惜しんで互いに思いの丈を書き綴ったといえます。吉田さんは七月二十五日に下北半島に到着し、尻谷岬で約二十人の仲間と穴に潜み、敵を待ち構えましたが、八月十五日に雑音がひどいラジオで終戦を知り、武装を解除。大湊では、敗戦を悔やむ市民から石をぶつけられることもあったといえます。「一度は死を決した私たち。特攻で散った仲間のためにも、生き残った自分たちが日本を復興させなければならぬ」と考えました。復員後は、定時制沼宮内高に学び、仕事も地域のことでも真剣に取り組みました。戦争は何の利益も生み出しませんでした。勝っても負けても人々の苦しみは一緒です」と吉田さんは語ります。

日本史上かつてない激動の時代、町の人々は当事者として懸命に時代と向き合い、生き抜きました。家族を残して故郷を離れ、戦場で死線を乗り越えた皆さんは今日、どんな思いを抱くのでしょうか。戦地に赴いた皆さんの証言を紹介します。

戦域略図



日本軍は東京から3000*も離れた地まで戦線を拡大した。点線は日本軍の最大占領区域（昭和17年ごろ）

3

どんな困難があろうと生きて家族の元へ 満州の前線から五百キロにおよぶ脱出行



佐藤 正三さん
(89歳、柳橋)

「もし捕虜になっていればシベリア行き。体の弱かった私は、おそらく生きて帰れなかったでしょう」と語る佐藤さんは、満州（現中国東北部）から決死の脱出行を経て日本に帰国しました。国鉄の係員だった佐藤さんは昭和十九年九月、二十九歳のときに召集。入営した横須賀から任地に向かう列車の窓は、機密保持のためブラインドが下ろされ、任地や配属は一切知らされませんでした。佐藤さんは、「下関から韓国釜山を経てさらに北上するようすから、任地が満州だと分かりました。到着したのはソ満国境の町ムーリンで、情報連隊に配属されました。軍隊生活は大変厳しく、真冬の夜間演習は、零下六十度を超える気温に備えて六重の重ね着をして臨み、汗だくになったと思えば冷えた汗

で猛烈な寒気に襲われました」と当時を振り返ります。その後、過労で肺炎になった佐藤さんの入院中に部隊は沖繩へ。途中の洋上で攻撃を受けて全滅し、残った佐藤さんは重砲連隊に転属しました。そうした中、昭和二十年八月七日、突如満州に侵攻したソ連軍と事態を把握できないまま交戦。この間佐藤さんは、自ら決死隊に志願し、部隊にも玉砕命令が出ましたが、幸運にもその度に敵が撤退して生還しました。その後、生き残った約百三十人は、多くの戦死者を出しながらも規律を保ち、虎やオオカミが潜む山地を行軍して朝鮮へ向かいました。すでに食料はなく、特に塩分が欠乏。山中で岩塩を見つけたときは、人生最高の喜びだと思いましたが」と振り返ります。

終戦を知らずに行軍を続ける部隊に、投降を促すソ連軍の使者が何度か訪れましたが受け入れず、その後、近くの炭鉱で働く日本人から敗戦を知らされ、十月に部隊は解散。隊員約七十人は、武器を山中に隠し、捕虜とならずに一般



佐藤さんが自分の戦争体験を孫に伝えようと執筆出版した「終戦後の悪夢」(沼宮内公民館所蔵)

4

ここは日本だよ、おつかれさまでした シベリア抑留生活を生き延び家族と再会



上沢 栄八さん
(94歳、橋場)

「到着した舞鶴港でここは本当に日本か？この地面を踏んでみる！と皆で騒いでいたら、道端で見ていたおばあちゃんが、『ここは日本だよ。おつかれさまでした』と言ってくれました」と語る上沢さんは、昭和二十三年三月、シベリアでの抑留生活を終えて帰国しました。川口郵便局で働いていた上沢さんは昭和十九年九月三十一歳のときに召集され、満州に配属。翌二十年四月末に鉄道隊に転属し、約五十人の隊員とともに人里離れた山中で鉄道建設に従事しました。

八月に入り、ソ連軍の満州侵攻を知らないまま終戦を迎えた上沢さんたちは、電話で告げられた、無条件降伏という意味を日本の勝利と勘違いし、その夜あっという間の酒を飲んで大騒ぎしたといえます。後に武装解除を受けた上沢さんはシベリアに抑留され、レンガ工場での労働を経て、昭和二十二年から山中で森林伐採やまき割りに従事させられました。作業は大変な重労働で、食料はわずかなパンとスープだけ。冬は零下三十度の中で作業する劣悪な環境の中、二人一組で一日一間分のまきを作るノルマを

課せられました。ノルマは日に日に厳しくなり、作業に従事していた約千五百人は、飢えと疲労のため次々と倒れ、半数近い約八百人が亡くなりました。

上沢さんは、昭和二十三年の二月十四日、ともにまき割り作業をしていた相棒から、こんな地獄のような作業は耐えられない。一本残ったこの大木の下敷きになって一緒に死のうと誘われました。私は、内地には、三人の子ともと妻が待っているし、妻のお腹にはこれから生まれる子どももいる。ここで無駄死にするわけにはいかないと必死に断り、何とか決行を思いとどまらせました。後でたき火の明かりで見たら、二人とも腰が腫れ上がっていました」と当時を振り返ります。

その後、軍医の診断で作業を休むことができた。三月にナホトカ港を出て舞鶴港に到着し、念願の帰国を果たしました。

「川口駅では、家族が総出で私を出迎えてくれました。初めて対面した三女は、きれいな着物を着てかわいかったですよ。戦争についての考え方は人それぞれですが、もし戦争に勝っていれば、ますます多くの大人や子どもたちが私のように戦地に駆り出されていったらどう思うと思います。戦争のない世の中をつくり、皆が公平に幸福になることが一番大事なのではないでしょうか」と上沢さんは語ります。



出撃の前夜に回した吉田さんの寄せ書き。勇ましい言葉の数々が少年兵たちの純粋な決意と切ない心の内を感じさせる

1993

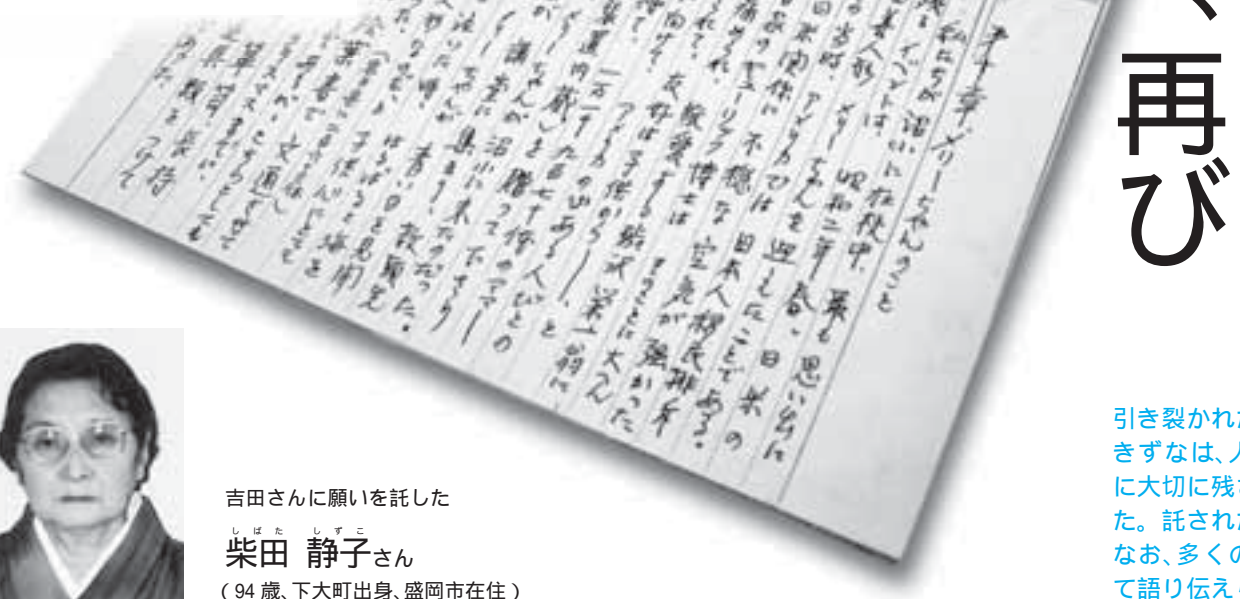
平成5年7月30日
第3章

「メリーちゃん」をよろしく きずなを再び

引き裂かれたかに見えな
きずなは、人々の心の中
に大切に残されていました。
託された願いは今も
なお、多くの人々によっ
て語り伝えられています

小学校で一番の思い出だったメリーちゃんが無事
でいることを知ったとき、心からうれしく、ありが
たく思わずにはいられませんでした。メリーちゃん
は小さな人形だけれど、苦難の多かったあの激動
の時代を、私たちとくぐり抜けてきた貴重な存在。
単なる物や思い出として片付けて欲しくはありま
せん。託された願いを後世に伝えてほしいのです。
メリーちゃんを、よろしくお願ひします

柴田静子さんの手紙より



吉田さんに願いを託した
柴田 静子さん
(94歳、下大町出身、盛岡市在住)



「広がりはじめたきずな」
吉田さんは、平成六年から毎
年、ひなまつりの節句に同小を
訪問し、メリーと対面を続けて
きました。初めは吉田さんだけ
でしたが、次第に関心を持つ人
が多くなり、学校関係者や老人
クラブの皆さん、公民館事業の
参加者など大勢の人たちが一緒
に訪問するようになりました。
後に同小の児童たちも生活科
や総合学習の一環として一緒に
参加するようになり、やがて集
いは「ひなまつり交流会」とし
て学校行事化され、毎年恒例の
有意義な地域交流の場として
大勢の町の皆さんに親しまれる
ようになりました。

会では毎年、ひなまつりやメ
リーの歴史が語られるほか、会
の最後には、参加者全員による
記念撮影を行うのが恒例となっ
ています。撮影された記念写真
には、年を重ねるごとにメリー
に対する町の人たちの関心が高
まっていくようすや、交流を通
じて参加者たちにきずなが芽生
え、どんどん広がっていくよう
すが写し出されています。

「沼宮内温故知新」始まる

こうした一方で、沼宮内公民
館は今年二月、町の歴史や当時
を知る人たちの貴重な証言を保
存し、後世に伝えようと、「沼宮内
温故知新」事業を新たにスター
ト。多くの希望によって、メリー
の歴史が第一回目のテーマに選
ばれました。事業では、メリー
が来校した当時を知る同小の卒
業生の証言により、来校時のよ
うすや児童たちとの関わりなど
これまで知られてこなかった
数々の事実が明らかになり、参
加者から大きな反響が寄せられ
ました。さらに後日、メリーに対
する関心の高まりを知った昭和
二十三年度の卒業生、鍋倉秀子
さん（七十二歳、下五日市、旧
姓府金）から、鍋倉さんが三年
生だった昭和二十一年三月三日
に同小で行われたひなまつりの
記念写真が同事業に寄せられ、
写真の中にメリーの存在を確
認、当時を知る貴重な資料とし
て、大きな関心を集まりました。

「この人形は大切な宝物」

「メリーちゃんという人形が沼
宮内小学校にあります。この人
形は大切な宝物。どうか吉田さ
ん、この人形をみんなから大切
にもらえるように計らって
くれませんか。」

平成五年七月三十日、地元の
老人クラブの事務局を務めてい
た下大町の吉田幸助さん（当時
五十九歳）は、当時会員で近所
に住んでいた柴田静子さん（当
時七十九歳）と柴田さんの小学
校時代の同級生たちに招かれ、
突然こんな願いを託されました。
その時は何の事なのかまるで分
からず退席した吉田さんでした
が、その後、柴田さんから届い
た手紙を読み、「友情人形」につ
いて初めて知りました。

手紙には、柴田さんが同小の
六年生の時にメリーを迎えたこ
とが忘れることのできない大切
な思い出であることや、自ら調
べてまとめた友情人形の歴史、
そして、メリーが平和の尊さを
身をもって今に伝える貴重な存
在であることなどが切々と書き
つづられていました。

大きく心を動かされた吉田さ
んは、早速同小に人形存在を
確認。学校の快諾を得て、同小
の資料室に保管されていたメ
リーと、初めて対面しました。

発見されたメリーちゃん

メリーが、再び子どもたち
の前に姿を現したのは、昭和
五十四年のことでした。

当時、同小の事務員として働
き始めたばかりの岩崎洋子さん
（五十六歳、館）は、学校の作法
室で児童たちが何かを見つけて
騒いでいるようすを聞きつけま
した。児童たちが指し示した押
入れの中には、ほこりだらけ
の古い木箱に入った西洋人形が
ありました。それがメリーだっ
たのです。当時の職員で友情人
形のことを知る人はなく、何の
人形なのかすぐには分かりませ
んでしたが、その後間もなく、偶
然に友情人形の研究者から学校
に人形についての問い合わせがあ
り、その素性が判明しました。
それ以来、同小では毎年ひな
まつりの節句に、メリーをひな
人形と一緒に飾るようになりま
した。



柴田さんに招かれた日の写真（平成5年7月30日）



「沼宮内温故知新」に寄せられた
62年前の記念写真
昭和21年3月3日 3年生のひなまつり

人々のきずなの広がり物語る「記念写真」



毎年メリーを
訪問している
吉田 幸助さん
(74歳、下大町)

当時の人たちの切なる願いに私も共感
多くの人たちにその尊さを伝えたい！

柴田さんの手紙でメリーのことを初めて
知った時、私は大変大きな感銘を受けました。
なぜなら、この小さな人形に託された平和と友
好を願う当時の人たちの気持ちに共感し、メ
リーが歩んだ数奇な運命に強く心を引かれた
からです。私自身は沼宮内小の卒業生ではあ
りませんが、ぜひ同小の児童たちにその尊さを
伝えたいと思い、これまで毎年学校を訪問し、
メリーや友情人形の歴史を語り続けてきまし
た。「記念写真」を見てのとおり、今でもメリー
は、その身に託された願いを多くの人々に伝
え、その心に友情のきずなをはぐくみ続けて
いるのです。欠かさず撮影してきた記念写真は、
そうしたきずなの広がりを物語っています。

1995



2003



2007



2008

ありがとう、メリーちゃん

きずな、未来へ

一枚の記念写真をきっかけ
に実現した62年ぶりの再会。
メリーが導いたきずなは未来
へと引き継がれていきます



夢と希望がいっぱいの輝く笑顔

大人になったからこそ分かることがあります。それは、子どものころの経験があったからこそ、今この自分があるということ。どんなに時が流れても、私たちのように仲良く再会できるように、皆さんも友だちのきずなを大切にしてくださいね。メリーちゃん、本当にありがとう。あなたが学校にいられたおかげで、六十二年ぶりに再会することができました。「今」という時を、とても愛おしく感じます。

再会を果たした皆さんの感想より

メリーが導いた「再会」

七月七日の七夕の日、沼宮内小で、昭和二十一年に同小の代用教員だった上大町出身の及川喜一さん（八十二歳、東京都在住）と、当時四年生だった昭和二十三年卒業の十八人の教え子たちが、メリーと六十二年ぶりの再会を果たしました。

この再会は、「沼宮内温故知新」事業を進める沼宮内公民館に、六十二年前に同小で撮影された一枚のひなまつりの記念写真が寄せられたことがきっかけでした。戦後間もない時期にメリーが写っている写真は非常に珍しく、写真に写っている皆さんから当時の話を聞きたいなど多くの関心と要望が寄せられた

同館では、早速再会の会を企画。及川さんや教え子の皆さんの快諾と同小の協力を得て、急ぎよ実現する運びとなりました。こうした貴重な機会をより多くの皆さんの有意義な学びの場のように同館は、この事業を「メリーの同窓会」と名付け、これまでメリーや同小に関わった多くの人たちに広く参加を呼び掛けました

今日は忘れられない記念日

当日は、同小の坂本行雄校長が「今日は沼宮内小にとって忘れられない記念日となるでしょう。チャイムも学校行事も今日はあえていつもどおり。学校から皆さんへのプレゼントです」と歓迎。及川さんと教え子たちはメリーとともに卒業以来の再会を喜び合いました。その後、同小の四年生児童と対面し、四年生だったころの思い出やメリーのこと、歳月を経て感じる子ども時代の大切さを、児童たちに優しく語り掛けました。六十二年前の四年生と八十一年前から学校を見守り続けるメリーを目前にした児童たちは、そうした歴史が自分の命とつながっていることを実感し、「私たちのように何十年経っても仲良く会えるよう、友情のきずなを大切にしてください」という言葉を、真剣な表情で受け止めました。



伊藤 静江さん
(72歳、盛岡市在住)

私たちの経験を伝えたい

あの暗い時代にひなまつりをできたことは、唯一ともいえる当時の明るい思い出。及川先生のお母さんが作ってくれたサッカリン入りのおはぎの甘さは今でも忘れません。そうした経験をした私たち大人は、今の子どもたちのために何ができるでしょうか。友情のきずなと今日という日の大切さを伝えたいと思いました。

そして最後に、恒例の写真撮影が行われ、八十一年目の記念写真がここにできあがりしました。



撮影された「81年目の記念写真」写真を寄せた鍋倉秀子さん「高風の間に集まった大勢の参加者 感想をまとめた児童たち メリーを見つめる児川さんと教え子たち 児童たちの真剣なまなざし

思い掛けない七夕の再会

気持ちはずいぶん10代に戻り、弾む会話や笑いの中に心地よい安堵感を覚えました。たった一枚の写真から始まった思い掛けない七夕の再会に本当に感謝です。明るく真剣な目をした子どもたちや、私たちを結んでくれたメリーちゃんの姿を見ていると、遠い国からのメッセージが聞こえるような気がしました。



鈴木 禮子さん
(72歳、宮城県仙台市在住)



久保 良子さん
(沼宮内公民館指導員、48歳)

今でなければ伝えられない大切なこの町の宝物がある

「温故知新」とは、今まで歩んできた歴史や、歴史を作った先人たちの考えや思いなどを知ることで、これから生きていくために大切なことを学ぼうとする考えです。まさにメリーの歴史と町の人たちとの関わりは、温故知新としての最高の題材であり、そこには多くの学べきものがあります。特に今回の事業では、遠方から大勢の皆さんが参加してくださり、皆さんのふるさとに対する強い愛着と、温かい愛情を切々と感じました。今日あるこの町は、多くの先人たちが大切に受け継ぎながら、今を生きる私たちに残してくれたものです。当館では、今後もそうした価値を後世に伝えるため、町ならではの題材をさらに取り上げ、この町には、今でなければ伝えられない大切な「宝物」があるということ、より多くの町の皆さんに伝えていきたいと考えています。



及川 喜一さん
(81歳、下大町出身、東京都在住、町ふるさと会会長)

ふるさととはありがたきものメリーちゃん、ありがとう

今回のきっかけとなった記念写真を初めて見せられた時、本当に懐かしく、またうれしく思いました。さらにこうした事業にお招きいただき、望郷の念に駆られてやってきましたが、こうして教え子たちや町の皆さんと触れ合うことができ、本当に感謝です。私は代用教員時代、黒板に「ボーイズ・ピーアンビシャス（少年よ、大志を抱け）」と英語で書き、子どもたちの成長を願いつつ、自らも精一杯生きることを決意しました。その後東京に出て、大手製薬会社に勤務。退職後は、町ふるさと会長の会を務めています。振り返ればふるさととは本当にありがたいものです。また、何事も一生懸命に努力したことは必ず自分の力になるものです。ふるさとの未来を担う子どもたちには、ぜひ大きな志を持って努力してほしいと思います。こうした縁を結んでくれたメリーに、感謝しています。本当にありがとう。

取材を終えて

メリーが来町して81年、そして戦後になって63年もの歳月が流れました。町内では平成20年8月1日現在、戦後生まれの人の割合は67%に達し、かつて激動の時代を体験した世代は、著しい高齢化が進んでいます。

そうした中、今回の取材では、普段聞くことのできない数々の貴重なお話をうかがうことができたほか、多くの関係機関から貴重な資料の提供を頂きました。誠にありがとうございました。再会を果たした皆さんが児童たちに贈った「友だちのきずなを大切に」という言葉は、まさしく81年前に米国の人々が人形たちに託した願いそのものでした。時代や国の違いを超えても変わらない願いが確かにそこにありました。

メリーは小さな人形ですし、決して言葉が話せませんが、町の人々の幸せを願いながら、今日も私たちを見守っています。こうして町の人々の心に、心のきずなが広がっていき、きつとメリーは喜んでくれているに違いありません。

特集 この町のカタチ
八十年目の記念写真 終

